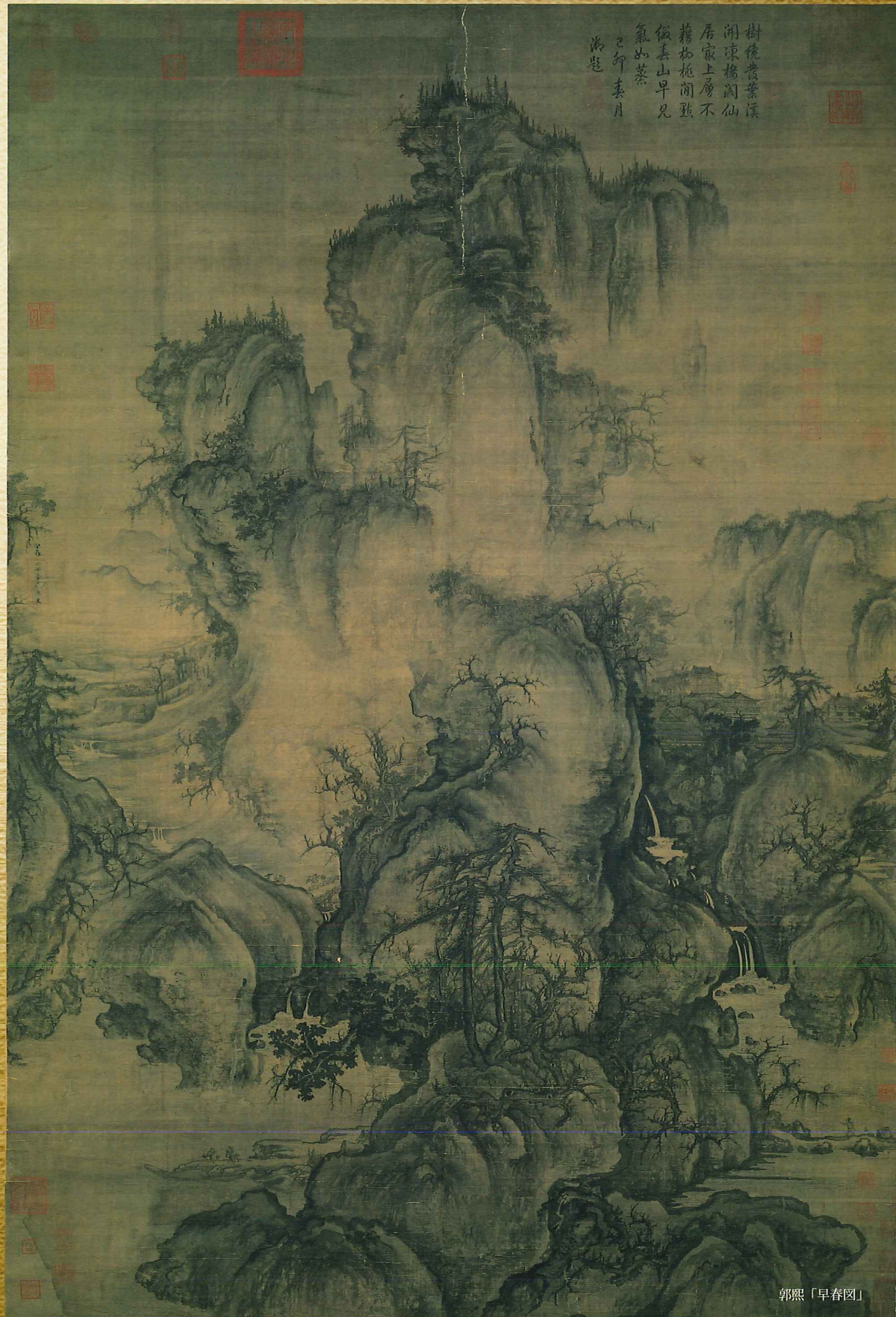


北宋絵画史の成立

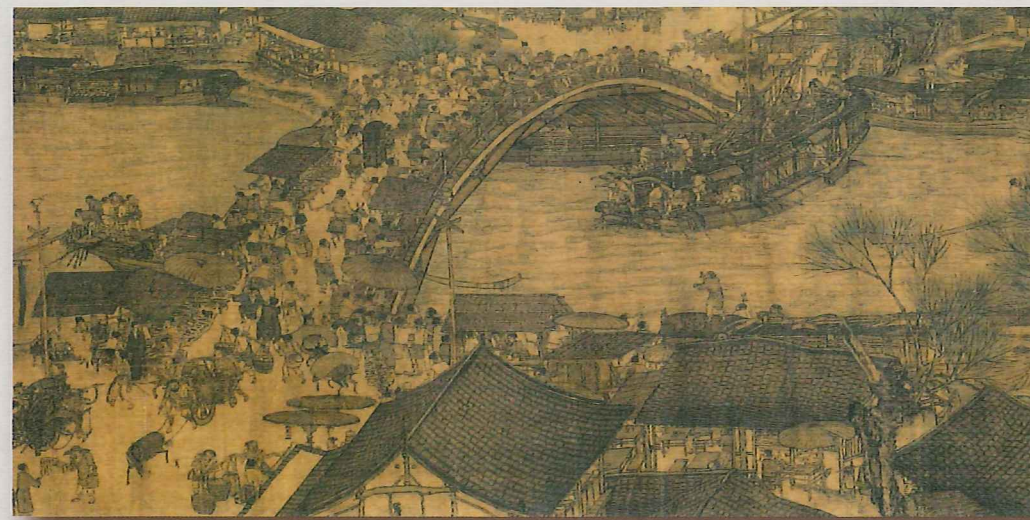
塚本 磨充 (東京大学准教授) 著

中央公論
美術出版



郭熙「早春図」

樹繞蒼葉深
閑疎梅竹仙
居寂上層不
藉松栢間
微嘉山早見
氣如蒸
己卯春月
滿題



張昉端「清明上河図巻」



李公年「山水図」

カラー口絵掲載作品

- 1 郭熙「早春図」(北宋、熙寧5年〔1072〕、台北・國立故宮博物院)
- 2 「釈迦如来像」(北宋、雍熙2年〔985〕、清涼寺)
- 3 孝宗御書「太白名山碑」(南宋、淳熙5年〔1178〕原書、13世紀拓本、東福寺)
- 4 張昉端「清明上河図巻」(北宋、12世紀、北京・故宮博物院)
- 5 蔡襄「謝賜御書詩表巻」(北宋、皇祐5年〔1053〕、台東区立書道博物館)
- 6 高宗「徽宗文集序」(南宋、紹興24年〔1154〕、文化庁)
- 7 趙令穰「秋塘図」(北宋、12世紀、大和文華館)
- 8 「五色鸚鵡図」(北宋、12世紀、ボストン美術館)
- 9 李公年「山水図」(北宋、12世紀、プリンストン大学美術館)
- 10 石濤「廬山観瀑図」(部分、清、17-18世紀前半、泉屋博古館)

塚本磨充 (つかもと・まろみつ)

【経歴】

- 1976.11 福井市生まれ
- 1999.3 東北大学文学部史学科東洋・日本美術史専攻 卒業
- 2001.3 同文学研究科歴史科学専攻東洋・日本美術史 博士前期課程修了
- 2001.4 同博士課程後期入学
- 2001.9～2003.8 南京師範大学美術学院に留学
(中華人民共和国政府奨学金給付)
- 2003.9～2004.8 国立台湾大学芸術史研究所に留学
(中華民国教育部奨学金給付)
- 2005.4 大和文華館 学芸部部員
- 2010.9 東京国立博物館 研究員
- 2011.7 東北大学 博士(文学)取得
- 2015.4 東京大学 東洋文化研究所准教授

【主要編著書】

- 『台北 國立故宮博物院—神品至宝—展 図録』 東京国立博物館、2014
- 『上海博物館 中国絵画の至宝展 図録』 東京国立博物館、2013
- 『中国山水画の20世紀—中国美術館名品選— パンフレット』 東京国立博物館、2012
- 『北京故宮博物院200選展 図録』 東京国立博物館、2012
- 『中国書画探訪—関西の収蔵家とその名品』 二玄社、2012
曾布川寛 監修 関西中国書画コレクション研究会 編
- 『崇高なる山水—中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜—展 図録』 大和文華館、2008

【受賞歴】

- 第21回 國華賞 (展覧会図録賞)、2009年10月
- 第24回 國華賞、2012年10月

関連書籍

臥遊 中国山水画 その世界

小川裕充 著 本体価格 43,000 円+税

B5判上製函入 本文310頁 カラー口絵136頁 挿図1000点
ISBN 978-4-8055-0454-3 C3071 2008年10月

【國華賞受賞】 唐宋山水画研究

竹浪 遠 著 本体価格 28,000 円+税

B5判上製函入 本文472頁 口絵16頁
ISBN 978-4-8055-0736-0 C3071 2015年2月

【國華賞受賞】 米芾「画史」註解

古原宏伸 著 セット本体価格 68,000 円+税

上巻 本体価格 33,000 円+税 B5判上製函入 本文460頁 挿図497点
ISBN 978-4-8055-0608-0 C3071 2009年9月

下巻 本体価格 35,000 円+税 B5判上製函入 本文478頁 挿図598点
ISBN 978-4-8055-0609-7 C3071 2010年5月

院政期仏画と唐宋絵画

増記隆介 著 本体価格 15,000 円+税

A5判上製函入 本文576頁 カラー口絵16頁 挿図201点
ISBN 978-4-8055-0724-7 C3071 2015年12月

お取り扱い

中央公論美術出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-10-1

IVYビル 6F

TEL 03-5577-4797 FAX 03-5577-4798

本体価格 28,000 円+税

B5判上製函入 カラー口絵8頁 本文720頁 挿図400点

ISBN 978-4-8055-0758-2 C3071

本書は、北宋時代に成立した文物の収蔵、公開機関である三館秘閣を中心に、北宋絵画史の成立に至るまでの過程を扱うものである。中国社会を成立させる最も根源的な制度の一つであったといえる「文物」の存在と機能の意味を問い、交流史を結節点に、モノが移動し、形や意味を変容させていく過程を総体として捉え、人間の自己意識や歴史意識の観点から、人間と作品の関係性によって紡ぎだされる「文物」の歴史を解明する。中国絵画の金字塔である北宋絵画史の成立について、従来の美術史学がとってきた様式論的なアプローチを基礎としながら、「美術」ではなく「文物」という観点と北宋の社会的な文脈の中から解釈しようとする画期的論考。

目次

はじめに 「美術」から「文物」へ——「交流史」を結節点とした方法論的な若干の考察——	はじめに 「宋」から「元」へ——「交流史」を結節点とした方法論的な若干の考察——
第一節 なぜ交流が問題となるのか	第一節 「太白名山碑」概要
第二節 日本の中国絵画史研究と交流史研究	第二節 宋代皇帝御書の変遷と孝宗書風
第三節 美術史学と歴史学	第三節 皇帝御書と宋代の社会
第四節 「文物」という概念・交流の世界と本論の構成	第四節 「太白名山碑」と南宋禮院
おわりに 北宋文物の場所・鑑賞者とその消失から再生まで	おわりに 「太白名山碑」の変容
序 近代における「中国美術史」の成立とその認識 矢代幸雄・滕固・シックマン——	附：年表「宋代御書年表」
はじめに	
第一節 最初期における「美術史」記述	
第二節 中国の近代知識人と美術史	
第三節 滕固「唐宋絵画史」(一九三〇)と中国美術史学会の成立(一九三七)まで	
第四節 矢代幸雄と滕固「起点としてのロンドン中国芸術国際展覧会」	
第五節 その後の「中国美術史学会」	
第六節 矢代幸雄とシックマン	
第七節 ロンドン・北京／東京・カンサス	
第八節 中国初期山水画史へのまなざしとそのコレクション形成	
おわりに 「美術史」以前——近代の中国美術コレクションと美術史家の誕生	
第一章 漢魏六朝から隋・唐の文物収蔵と文物観の変遷	
第一節 文物と中国社会	
第二節 漢代宮廷における文物収蔵——天人感応の場としての宮廷と文物——	
第三節 魏晉南北朝——法書名画と目錄の誕生	
第四節 隋の建国理念と佛教、宮廷コレクションション	
おわりに 唐朝から宋朝へ・宮廷文物制度の完成と継承	
第二章 北宋初期秘閣の成立とその意義	
はじめに	
第一節 北宋初期秘閣の成立(九六〇—九九二)	
第二節 佛教文物の収集と開封	
第三節 啓聖禮院の構成とその意味	
第四節 高文進「弥勒如来像」と齋然の入宋請求文物	
第五節 大相国寺の莊嚴とその鑑賞者	
おわりに	
附：年表「齋然入宋関係年表」	
第三章 北宋宮廷文物公開の場と鑑賞者	
第一節 真宗朝の観書会——秘閣・龍圖閣・太清樓——	
第二節 仁宗朝の観書会——三朝の顕彰——	
第三節 宋朝の文物展覧と館職	
第四節 曝書会から曝書会へ	
第五節 北宋における瑞物の収集と展示	
第六節 秘書省、宣和・保和殿と徽宗朝の文物宣示	
第七節 「清明上河図巻」の展覧とその淡彩表現	
おわりに 宮廷文物・場所の消失と北宋文化の新しい生命	
付論 蔡襄「謝賜御書詩表巻」と宋代宮廷の刻碑文化	
附：年表「北宋三館秘閣六閣における文物観賞(略稿年表)」	
第四章 郭熙画山水の成立とその意味	
はじめに	
第一節 帝制開封とその画家たち	
第二節 郭熙の生年	
第三節 郭熙「早春図」とその歴史意識	
第四節 郭熙山水の高麗への下賜の歴史的背景と意義	
おわりに 李郭派への長い歩み	
	第五章 宋代皇帝御書の機能と社会——孝宗「太白名山碑」(東福寺蔵)をめぐる——
	第一節 「太白名山碑」概要
	第二節 宋代皇帝御書の変遷と孝宗書風
	第三節 皇帝御書と宋代の社会
	第四節 「太白名山碑」と南宋禮院
	おわりに 「太白名山碑」の変容
	附：年表「宋代御書年表」
	第六章 北宋秘閣の成立と東アジア
	はじめに
	第一節 北宋秘閣の成立と東アジア
	第二節 遼との文物交流と三館秘閣
	第三節 高麗宮廷コレクションの成立と北宋三館秘閣
	第四節 日本の文物交流と「海外書」
	おわりに 東アジアの蔵の交流と文化形成
	第七章 李公年「山水図」(プリンストン大学美術館蔵)と北宋後期李郭派の展開
	はじめに
	第一節 作品の現状と落款印章について
	第二節 李公年の伝記に関する若干の補足
	第三節 李公年の月光表現と李郭派山水の展開
	第四節 『宣和畫譜』にみる李公年への批評語の分析
	おわりに 朝鮮李郭派への展望
	附：表「文臣」の山水・『宣和畫譜』のなかの批評語の変遷
	第八章 郭熙時代における郭熙と李成——宋代画家像の受容と変容の一例として——
	はじめに
	第一節 郭熙山水の特殊性
	第二節 「林泉高致集」の流伝と言葉——郭熙、第一の歴史化——
	第三節 郭熙山水の展開(一)——物語の舞台としての李郭派山水・崇高性と故事性——
	第四節 李郭派山水の展開(二)——図様の継承——
	第五節 石濤「廬山觀瀑図」と袁派
	おわりに 近代社会と李郭派の再発見にむけて
	第九章 二つの趙令穰——「秋塘図」・「湖莊清夏図巻」とその受容史について——
	はじめに
	第一節 北宋太祖五孫・趙令穰について
	第二節 「秋塘図」と「湖莊清夏図巻」
	第三節 趙令穰と近代日本
	おわりに 『中国絵画の歴史』をめぐる
	終章 宋画の描写と空間理解——「雪中帰牧図」「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」を例として——
	はじめに 宋画への眼差し
	第一節 「雪中帰牧図」と宋画の精神
	第二節 「蜀葵遊猫図」「萱草遊狗図」と宋画の描写
	おわりに 名画伝説
	付章 宋・元画のなかの器物表現——画中の古物表現とその意味を中心に——
	はじめに 画中器物への視座
	第一節 器物表現と画意
	第二節 古物を描く
	第三節 イリュージョンとしての古物表現
	おわりに 画中器物と古物の世界
	おわりに 文物がくくる社会
	初出一覧／史料／附：年表「北宋三館秘閣年表稿」／中文摘要

古物は、決してそのモノ自体単独で存在していることはあり得ない。そこにはそれを支える基底材や箱、入れ物としての倉庫や共同体、現在でいえば美術館・博物館、そしてそれを支える人々の営みや社会の仕組みがあり、それに囲まれるようにしてはじめて「作品」として存在し得るからである。社会から意味を与えられることで、モノはある社会の中で伝来していく。しかしながら、実はその社会も、モノの持つ意味を必要とし、それによって自らのアイデンティティを作り上げていくのである。これらのモノが人間社会にとって不可欠であるのは、それらが社会のなかで意味を発生させることで伝来し、また伝来する過程で社会を形成し、そのことで再び社会の中に意味を与えていくからである。「モノ」と「人」との意味発生の相互作用とすることもできよう。ここではこのことを「モノ」から「文物」への転換、また「文物」の歴史」とよび、それらが交錯する過程を美術史学の積極的な考察の対象とする。そしてその具体的な展開の歴史を考察することこそが、本書の目的である。

《中略》

靖康の変以降、北宋宮廷は地上から消え去り、その場と文物の意味はなくなってしまう。いくつもの「モノ」と「言葉」は地上に残されていた。そのことで消えることない永遠の宋画は形成され、呼び起され、新たな意味を付与される。現在私たちが認識できる「北宋絵画史」は成立していったのである。本稿でいう「北宋絵画史」とは、従来までの美術史学が積極的な考察の対象にしてきた、いわゆる制作時の背景や美的特質を攻究することのみを指す概念ではない。北宋時代にとどまらず、それがいま、眼前にまで伝えられてきたその過程全体、つまりそこに参画してきた全て地域・時代の、作品を伝え、学び、時には変容させてまでいった人々の歴史全体を、ここでは「北宋絵画史」としてとらえていく。それは、「モノ」の生命は生産地だけの歴史で完結するのではなく、それが移動した地域の歴史をも作っていくからであり、近代国家間の「影響」「被影響」や「文化的主体性」の模索と言う単純な模式ではなく、モノが移動することによって社会を形成し、新しい共同体で新しい意味を獲得する全体の歴史としてとらえる視点である。本書の題名を特に「北宋絵画史」の成立」とした所以である。

私たちは古物に出会う時、物言われぬ深い感動を覚える。それはもちろん古物自体の形式が持つ美しさに魅せられる側面が強い。しかしそれだけではない。古物を通じて我々はそれを支えてきた人間や、それに感動する自分自身と出合い、またその古物の持つ意味と価値から多くを学び、自分自身と社会を作り上げていくからである。そこからは、「中国」で生まれた絵画がアジア各地に移動していくことによって、さらに各地の共同体に継承され、新しい生命を得て継承されていった、豊饒な世界観が見えてくるに違いない。そこには近代的な国家によって生産地ごとに分断されて新しい「国籍」を持たされ、様々な近代的な価値観によって名づけられた「名品」たちが紡いできた従来の歴史観ではなく、モノが移動し社会を作っていく、モノを結節点とした生き生きとした社会や共同体の形成の姿が見えてくるだろう。そしてそこに、これから私たちが進むべき、新しいアジア絵画史の姿を垣間見ることができたなら、これ以上の幸せはないと思っている。

はじめに「より

組見本 (約 30%に縮小)

